

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



宗祖親鸞聖人五百回御遠忌「御当日（御満座）之事」庭儀発楽前
御門跡様着座後の舞人・楽人奉向幄前奏一曲の図／西尾市岩瀬文庫所蔵

写真の無断転用はご遠慮下さい。

原子の核分裂が発する放射線は、細胞組織の破壊にとどまることなく、我が長い歴史の中で築いてきた地域、家族、夫婦、親子の「絆」をも破壊して

い。原子の核分裂が発する放射線は、細胞組織の破壊にとどまることなく、我が長い歴史の中で築いてきた地域、家族、夫婦、親子の「絆」をも破壊して

い。原子の核分裂が発する放射線は、細胞組織の破壊にとどまることなく、我が長い歴史の中で築いてきた地域、家族、夫婦、親子の「絆」をも破壊して

い。原子の核分裂が発する放射線は、細胞組織の破壊にとどまることなく、我が長い歴史の中で築いてきた地域、家族、夫婦、親子の「絆」をも破壊して

い。原子の核分裂が発する放射線は、細胞組織の破壊にとどまることなく、我が長い歴史の中で築いてきた地域、家族、夫婦、親子の「絆」をも破壊して

浄土の莊嚴

今号表紙の写真は、宗祖五百回御遠忌の庭儀の様子を描いた絵である。と推測される。原本は、西尾市岩瀬文庫に所蔵されている『東本願寺法要之図』からの抜粋だが、この書物の信憑性については、小生の学識では定かでない。しかし、今から二百五十年前（江戸時代中期）の我らの先達が、その時代の最高のもので浄土を莊嚴し、宗祖の恩徳に報謝しようとする姿勢に学ぶに、十分な資料と言えよう。

頭の下がったところに仏さまがいる
（本誌二面・三面「真宗儀式の教相」）
竹橋 太氏

一見、華々しく描かれている二五十年前の御遠忌の絵の背後に、飢饉に苦しむ民がいることを忘れてはいまいか。そして、時の権力者・豪商による統制の中で、犠牲になっている民がいることを忘れてはならない。

なかなか頭の下がらない私に、儀式という「かたどり」をもって、仏さまに遇わせしめようとした無数の念仏者によって伝えられてきた歴史。そこに連なる、この身に余る至福の時を過ごせる歓喜を忘れ、今、私は、いったい何をしているのだろうか。

（教化センター主幹 荒山 淳）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録「真宗儀式の教相」 ②・③
- ・ 尾張のお講
- 中島郡会レポート - ④・⑤
- ・ 近現代史
「原爆被曝と原発被曝」 ⑥・⑦
(第23回平和展)
- ・ INFORMATION ⑧

◆ 挟み込み (※寺報などにご利用ください)

講義抄録

2011年9月16日

〈研究生「教化研修」〉
「真宗儀式の教相」たけはし
竹橋ふとし
太

(本廟部出仕)

第8回

「いまここにこうして有る」ということが、既にすこいこと

我々はふだん何気なく「暑いとか寒い」とか言っているわけですが、「月」では日の照っているときは、何百度にもなり、日がしずむと、零下百何度となるのだそうです。地球から月を「きれいだなあ」と、呑気に見ていますが、空気もなく凄まじい温度差があつて、とても人が住めるような場所ではありません。広い宇宙の中で、ほんの十度や二十度の温度変化の中で、私たちは「暑い、寒い」と言っていますが、たまたま地球にこういう条件がそろつたから、生命が生まれ、我々がこうして存在しているのです。これは本当に不思議なことと。ところが、我々はどうしても「自分の思いを中心にして自分自身や世界を眺め、それを評価する」という構造を持っていて、不平不満を言いがら生きています。

仏教では、「無始爾来」無始よりこのかた、「衆生は迷つて生きていて、宇宙がはじまる以前の歴史を背負つて我々一人一人が、迷いの存在としていまここにこうして有ると言います。不思議

なことですね。しかし本当の話です。ですから、いまここにこうして「有る」ということが、既にとてもすこいことなんだと思います。

けれども我々は、その自分のあり方に満足せず、周りの世界を変えていくことばかりに関心が向かつてしまっています。そして、自分自身を見ないようにして、嫌なところを世の中のせいにして、「敵か」「味方か」という関係を生み出しているのです。一切皆苦というお釈迦さまのことは、仏教が人間をそういう存在として観ていることだと思ひます。

頭の下つたところに仏さまがいる

このことを親鸞聖人は、「凡夫」とか「悪人」、あるいは「罪悪深重」とか「煩惱成就」「煩惱具足」などと言われています。たとえば「煩惱成就」と言つた場合は、煩惱が私になつていてという感じです。これはまた仏教の人間観、つまり縁起にもとづく人間観です。無始爾来、既に迷いがあり、それが今こうして私となつていて。これは、常に私たちの帰るべき原点

であろうと思ひます。

親鸞聖人は、八十歳を過ぎてまで、『愚禿悲歎述懐(和讃)』などを書かれています。「虚仮不実のわが身」、「こころは蛇蝎の如くなり」などと言われております。「親鸞聖人は自身にとっても厳しくて厳密な人だ」と言われることもあるのですが、私はそうは思ひません。浄土真宗の「救い」というものが、こういう言葉となつているのだと思ひます。

「悪人だ」と言えるのは、阿弥陀さまに撰取されているからなのです。私たちは本物に出会うと本物のほうに体を寄せ、自分が解つた者であるかのように錯覚してしまうという人間であるゆえの構造上の欠点を持っています。人間は自分が正しいと思わなければ生きていけない。「あいつはわかつてない」と、「わかつてしまった人」は、そういう分け方をして生きてゆくようになっていきます。

親鸞聖人は、そういうあり方が「迷い」なのだと思ひます。それが「救い」と教えてくださっています。「阿弥陀さまはどういうものか」ということよりも「自分は偽者だった」と、頭が下がつたところに仏さまがいるのです。それが「南無阿弥陀仏」の意味です。阿弥陀さまに出

会う時は、かならず「南無」しかないのです。

前にも話しましたが、お念仏で救われるのではなく、お念仏が救いそのものをあらわしている。南無と言って手を合わせ、頭が下がっている。そこには必ず仏さまがいらつしやる。『悲歎述懐』とは、まさにそういうことを示しているわけですね。苦楽の問題ではなく、「ああ本当に間違つてたな。ごめん」と言えたらすごく安心するじゃないですか。少し軽いたとえですが、そういう感じですね。けれども決して自分が変わつて正しい者になるではありません。そういうことはよくよく考えておいていただきたいと思ひます。

お荘厳

お荘厳などについては、いろいろな質問をいただきます。例えば、「輪灯とは何ですか」とか、「仏具は何で金色なのですか」などです。はっきり言えば答えはないのです。蠟燭は仏さまの智慧を表し、仏花は慈悲を表すとされたりします。お説教としては結構なのですが、もとをたどれば、この三具足という形式は室町時代に中国から入ってきた床間飾りの一種です。蓮如上人が仏さまの荘厳に当時の最新の文化を取り入れたのです。

どうしても私たちは、お荘厳には一つ一つの意味があつて、それが総合して何らかの意味を持っていると分析的に考えてしまひます。どうしても、こちらからの何らかの意味づけがないと落ち着かな

いのです。

意味づけで大事なことは、最高の物で飾るということです。一つ一つの事柄には意味がない場合が多いのです。最高のもので荘厳する、それによって別のすばらしい世界（超越）がこちらに來ていることを示そうとしている、そういう方向性が大事なのだと思います。

たとえば、「派手な仏事はやめて、何か浄土真宗のエッセンスというものを表現する必要があるんじゃないか」などということを我々は考えることがありません。私の中に潜む「悪」を捨てていけば、中心には「綺麗な私」が残るに違いない。これは私たちの分別です。すべてを剥がしていったら何も残らない。「人間は玉ねぎだ」というのが仏教の考え方です。「黒衣を着て外陣に座つていてお勤めをしたら真宗らしいじゃないか」という思い、これも我々の分別のひとつです。どちらがより適当だろうかという議論はされていいと思いますが、決してきらびやかに飾られているからといって誤っているということではありません。その時々、最高のもの、自分の手に届く限りのことをする。そういう形で出来上がっているのが仏教の、浄土真宗のお荘厳なのです。

親鸞聖人は「ただ南無阿彌陀仏と称えるということを選び取ったから、儀式や荘厳なんかいらないんだ」というふうに考えてもいい。ただし、そういう考え方は、必然的に「お寺などなくてもいい」という結論にまでいきつきません。しかし、あつていいとも言えます。「南無阿彌陀仏がお寺になった。南無阿彌陀仏が儀式となった。南無阿彌陀仏が本山のあの大きな建物となった」といただくこともできます。そういう方向性を自分の中で確保できるかどうかです。正解はありません。どういただけか、という問題です。

方便とは

本山から受けられた阿彌陀さまの繪像の裏書には、「方便法身尊形」と書かれています。我々はそのご本尊に向かつて礼拝や荘厳をしているのです。「方便」ということは、まずは、分別の心とは関係ないということを意味しています。私たちは自分の分別でお荘厳をしているつもりですが、その分別をも超えるような意味が与えられるのです。方便というはたらきには計らいがありません。仏さまの方からこちらに來るのです。我々は「最高のものを仏さまにお供えする」という言い方をしましたが、実は、仏さまがそういう形でいま、私の目の前に現れていると考えなくては荘厳になりません。

「南無阿彌陀仏」が本尊であるということは、「法性法身」、「自然」あるいは「真如」と言ってもいいですが、それが形になったものということです。だから私たちが何に手を合わせているかという「真実」になのです。あるいは「縁起の道理」と言ってもいいですし、「空」と言ってもいいのです。

そして、仏さま（真実）に手を合わせるといことは、真実との出会いを表現しています。儀式はそれを、形として表現しているわけです。真実が仏さまの形

となつて、そこに私たちは頭を下げる。決して儀式をすることによって救われるわけでもなく、立派なお坊さんになつていくわけでもないのです。浄土真宗の儀式は、そういう出会いを表現しているわけです。それが方便ということ。真実そのものは、私たちが間違つていようが、いまいが、構わないんです。しかし、私たちの中に「不安」というサインをあらわします。人間は必ず死にます。思い通りにならないのが人生です。「不安である」ということは、人間であるということの証拠でもありますし、仏の慈悲の具体的なすがたそのものでもありません。

教化者意識

真実は伝えるものではなく、伝わって



いくものなのです。私が発した言葉を通して伝わったとしても、それは私が伝えただけではなくて、真実そのものの力によって、聞いた人の聞法してきた歴史と交わるというようなことが起こり、突然花が開いたりするわけです。真実はいつ、どこにあらわれてくるのかわからないのです。逆に言えば阿彌陀さまはどこにでもおられ、どんな形にでもなるということです。決して私が伝えたわけではないのです。間違つたことを言っても伝わる時があります。こちらがどう思つていても聞いている人の方がすばらしいということがあるのです。教化者意識とはつまり真実と世界を私有化することです。

大事なのは教化者意識を無くす努力ではなく、「教化者意識はなくなるらない」という自覚です。ただひたすら自分の教化者意識を知らされるだけです。そしてそれが聞法の歩みです。ですから「私の念仏はだんだん本物になつてきた」などということはありません。

真宗の僧侶は、こういう衣を着て、お寺という場、真実が表現される場をあくまで持っているのです。そういう役割を荷つてきたのです。儀式の場所も含めて全てのものが真実の回向表現となるのです。真実の方から來るのであつて、私が積み上げていくものではありません。真実がたとえば儀式というかたちであらわれてきている。こういう受け取りが大事だと思ひます。

（文責編集部）

尾張のお講

— 中島郡会レポート —

はじめに

センタージャーナル七五号で、中島郡会の本山御華束講について述べた際、御華束作りだけでなく、その背景についても調査・研究すべきことを指摘しておいた。今回はそれを受けて中島郡会の寄合・法要を取り上げ、御華束講の活動基盤に触れてみたいと思う。

一、郡会と小会

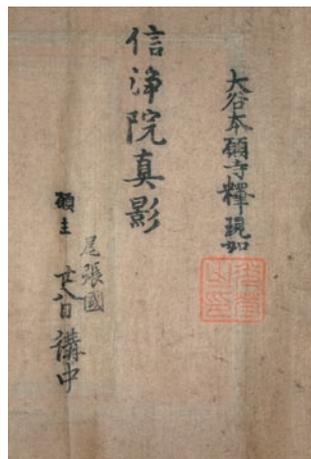
ひとくちに「中島郡会」と呼ぶが、この講組織は決して単独で存在しているわけではない。それに所属するいくつもの組に分かれており、「郡会」と称される全体で取り組む行事と、各地域の組ごとの「小会」の活動とがある。現在活動する小会は四組であるが、郡会現会長の竹山錦氏、同副会長の吉田勇夫氏への取材と、小会の一つ稲葉組の冊子『私たちの真宗と稲葉組の姿』（以下『稲葉組の姿』昭和四八年発行）、さらにそれを再編した『私達の真宗大谷派と稲葉組の現在』（以下『稲葉組の現在』平成三年発行）によれば、郡会結成時には十組あったという。ちなみにその十組とは、一宮組、

であるが、現在はそれはなくなり、各小会の法要時に会所に運ばれ、そこで掛けられ拝読されているという。

*1 それを裏付けるものとして、稲葉組の「世話方の会」が平成二一年に作成した『稲葉組大年番当番表』がある。それによると、本山（真宗本願）の両堂再建中である明治二三年に稲葉組（この時の名称については不明）が存在し、明治三年には稲葉組の法要として第一回の「郡会勤め」が催された。この時「中島郡会」の呼称があったという。

またこの場を借りて、本山報恩講の御華束作りの由来について付言しておきたい。先の七五号では二通りの伝承を挙げておいたが、実は、今回再び調査を進めていく中で興味深い記録に出会った。それは名古屋別院発行の『名古屋御坊』昭和四一年二月号の記事と、先述の『稲葉組の姿』『稲葉組の現在』にある記述である。あくまで後に書かれたものだが、それらによれば、先ず第二次大戦中の物資不足に際して、本山と名古屋別院の修正会の鏡餅を奉納することが始まり、さらに戦後の昭和四四年、本山での蓮如上人四五〇回御遠忌法要にあたって須弥盛華束が奉納され、翌年からは本山の春の法要と報恩講の御華束も奉納するようになったというのである（現在は春の法要は金納）。よって、明治二四年の濃尾地震の際に本山から多額の見舞金があり、その御礼として始まったというのは、本山及び名古屋別院への奉仕を目的とした、中島郡会の結成そのものを物語る伝承と見るのが妥当であろう。

※中島郡会所有の教如上人御影とその裏書



（下付者は「大谷本願寺釈現如」、願主は「尾張國 廿八日講中」である）

二、一宮組について

中島郡会では全体の郡会として名古屋別院を会所に、三月に総会と永代経、八月に盂蘭盆会、九月に報恩講が勤められるが（日にちは不定）*2、それとは別に小会においても、地域ごとに年一回寄合・法要が行われる。ちなみに現在活動する四組の法要の名称と時期は次の通りで、各組とも独自の御消息を伝えている。高木組―宝珠講、六月の不定日。稲葉組―郡会お勤め、九月の不定日。

一宮組―五日講、一〇月五日。
山崎組―信珠講、四月の不定日(休止)。

では、小会の法要について一宮組を例に挙げて見てみよう。まず法要の会所であるが、これは現在の名古屋教区第六組の寺院が有志で受け持ち、数ヶ寺で巡回する。そして午前・午後と、その本堂余間に前述の現如上人下付の教如上人御影が掛けられ、会所寺院住職が調声人となり、正信偈・和讃(弥陀成仏のこのかたは「次第六首」)がお勤めされる。今年のお勤めの後には住職による御消息の拝読があり、午前は一宮組所有の御消息、午後は郡会所有の御消息が読まれる。その後、招待された説教師の法話があり、正午にはお斎も用意される。また、あくまでも一宮組の門徒が主催者であるから参詣は一宮組が主であるが、他の郡会会員も参加し、地元の人たちにも声が掛けられて行われる。

次に、一宮組所有の御消息について見てみよう。年次・添状を欠くが証判は厳如上人で、宛先は「尾州 中畷郡 海東郡 海西郡 本山相続 五日講中」である。ただ「五」の字に加筆修正された跡があり、この御消息自体は、別の講に下付されたのを一宮組が引き継いだものである*3。しかしその一方で、文政元(一八一八)年に乗如上人より、「尾州中嶋郡拾一ヶ寺卅五ヶ村」にわたる「本山相続 五日講中」に対して、御消息が下付されたことが分かっており*4、現在

の一宮組は、近世に端を発する中島郡五日講の流れではないかと思われる。もっとも、一宮組の法要が勤められる一〇月五日が教如上人の祥月命日であり、さらにその教如上人の御影が中島郡会の什物として下付されているのを見ると、むしろ中島郡会自体が中島郡五日講を地盤として結成され、五日講の法要が一宮組の行事として受け継がれるようになったと見るべきかもしれない*5。

*2 もとは名古屋市中区大井町の中島郡会名古屋詰所で勤められていたが、平成二一年三月に同所は閉鎖された。

*3 さらにこの後、「愛知郡 春日井郡 丹羽郡 葉栗郡 知多郡 名古屋市」と別筆で書き加えられている。

*4 『真宗史料集成』第六卷(同朋舎)、「大谷派歴代消息 乗如集」。

*5 これに関連して、以前は一〇月中旬旬(もともとは一二月五日)に郡会として五日講を行ったという記録がある(『東別院護持団体のあゆみ』(名古屋別院発行)、前掲『稲葉組の現在』)。一宮組の法要の後に全体行事としても寄り合ったと解されるが、現在は勤められておらず、その詳細についてはよく分からない。

三、他の御消息から

このような小会の法要の形式は、他の組でも大体同じであるという。ただ、今回は他の組の法要に参詣することが出来

なかつたので、それぞれ所有する御消息から見えてくる所を述べてみたい。先ず高木組の場合であるが、これも年次・添状を欠くが証判は現如上人で、宛先は「尾州 中嶋郡 海東郡 海西郡 宝珠講中」*6という御消息である。『稲葉組の姿』『稲葉組の現在』によれば、そもそも宝珠講とは本山報恩講に際して土地の野菜を上納した講のことで、御消息は謝礼として下付されたものであるという。あまり知られていないが、毎年高木郡会からは、本山報恩講へ御華束とともに大根も奉納されている。これはまさに、この宝珠講の伝統を受け継いだものである。おそらく中島郡会には宝珠講もその地盤の一つとしており、後に法要・行事を高木組が受け継ぎ、他の会員も参加するようになったのであろう。

稲葉組についても同様の構造がある。現在稲葉組の小会で拝読される御消息は、宛先を欠く明治四四年九月二四日付の彰如上人証判のものであるが、実はこれは、本山の相続講制度改正にともない、その「再興」のために全国へ一律に下付されたものである。つまり、稲葉組の歩みそのものと直接関係があるわけではない。しかし、それとは別の御消息の添状が伝えられており、それを見ると、そもそも天保六(一八三五)年に達如上人より、「尾州 中嶋郡 海東郡 海西郡 本山相続 二日講中」に御消息が下付されたが、損じてしまったため新たに願い出て、明治七年に下付し直されていたこ

とがわかる。残念ながら、その後この御消息も損失してしまったのだが*7、ここにある二日講が現在の稲葉組へと繋がり、法要が行われていることは間違いないと思われるのである。

*6 この御消息にも別筆で「愛知郡 春日井郡 丹羽郡 葉栗郡 知多郡 名古屋市」と書き加えられている。

*7 今のところ、一宮組所有の御消息がそれではないかと考えている。なお、山崎組の御消息については残念ながら調査できなかった。

むすびにかえて

以上、調査の質・量ともにまだまだ不十分で、変遷については不明なことばかりであるが、本山護持に携わる広域の講が近世から中島郡地域にはいくつが存在し、それが中島郡会結成の地盤となっていることが、垣間見えてきたように思う。それらが郡会の小会へと受け継がれ、寄合・法要を行いながら、絶えず聞法の機会が持たれてきたことを忘れてはならない。中島郡会の強固な本山護持組織の背景には、このような重層的な門徒の講組織があるのであり、さらにこの小会を支えるそのまた背後に、各集落における小規模な講が存在するのである。本来ならばそれらも論じていく必要があるのだが、紙幅の都合により次の機会に譲ることとする。

原爆被曝と原発被曝

(第23回平和展)

はじめに

2011(平成23)年3月11日、日本は四度目の被曝をした。過去三回は核兵器による被曝であるが、今回は被災原子力発電所による被曝である。

本稿は、原爆と被災原子力発電所の被曝を自然科学の分野から見つめるものである。もとより、この分野は平和展スタッフの手に負えるものではないと考えるが、その緊急性・重大性から、被曝理解の一助とするための試みとして受け止めていただきたい。

尚真宗大谷派では繰り返し、諸外国の核実験には抗議声明を発表してきた。しかし、今回の原発事故(被曝)について、「国策」として原発を推進してきた日本政府などに対する抗議声明は出ておらず、また宗議会の声明も否決されており、核兵器と原発に対する姿勢の違いを鮮明にしていることを確認しておきたい。

一、長崎の被曝

原爆被害は三種類に分類される。「爆風」「熱線」、そして「放射線」である。このうち、「爆風」は原爆全体のエネルギー

の約50パーセント、「熱線」は約35パーセント、そして「放射線」はわずか15パーセントでしかない。

この放射線被害について、放射性降下物(爆発とともに発生し、時間を経て地上に降下するもの)には、ストロンチウム89・バリウム140・プラセオジウム144・ジルコニウム95・ストロンチウム137・セリウム144・プルトニウム239、そしてセシウム137が検出されている。このセシウム137は、半減期(放射線放出量が半分になる期間)が30年の性質を持っている。

1969(昭和44)年から1971(昭和46)年までの、長崎市西山地区住民のセシウム137の体内量は、他の地域の住民に比べ二倍近くに及んでいた。長崎西山地区は、爆発直後に降雨となった地区であった。

爆風や熱線による被害。そして急性放射性中毒は、原爆爆発直後に発生している。しかし爆発後何十年も経過して発症する「原爆病」は、この放射性降下物によるものも多いと考えられる。

被曝による健康被害には、①白血病



非核非戦の碑パンフレット
／長崎教区教化委員会提供

②癌 ③白内障 ④胎児の障害があげられる。

二、遺伝的影響

ここで確認しておきたいことは、動物実験により被曝による遺伝的な異常が明らかになっているが、現在までに広島・長崎の被曝者の子供たちに遺伝的な異常は認められていないことである。

ただし、この事実は遺伝的影響を完全に否定するものではなく、継続調査が必要となる。

三、被曝距離

被曝被害は、爆心地からの距離が大きく関係する。距離が離れば離れるほど、その被害は減少するのである。広島の場合、爆心地より500メートル以内での放射線障害による脱毛率は100%(屋外での被曝)、それが1キロメートル以内では90パーセント以下となり、15キロメートル以内では50%以下となっている。

る。

爆風・熱線とともに、放射線被害も爆心地からの距離が大きく関係しているのである。

四、ベクレルとシーベルト

報道など、被曝情報には「ベクレル」「シーベルト」の単位が使用されている。「ベクレル」とは「一秒間に一個の原子核が出す放射線量」のこと。つまり放射線の強さのことである。これに対し「シーベルト」は、放射線の体への影響度を表す単位である。

よって、「シーベルト」は、放射能の強さにかかわらず、それからの距離により変化する。地震の「マグニチュード」と「震度」との単位の違いと同様に理解すれば分かりやすい。報道で、「シーベルト」がより大きな問題として取り上げられるのは、この理由による。

五、体内被曝

被曝には、「外部被曝」と「体内被曝」がある。人体の外側から放射線を浴びることを外部被曝。そして水や食物などにより、体内に放射性物質を取り込むことを体内被曝という。チェルノブイリ事故後のオーストリア政府の調査では、外部被曝は15パーセント、内部被曝が85パーセントと報告されている。人体への危険

性は、「体内被曝」がかなり大きなものであることが理解できる。また、その被曝は日常生活のなかで継続するという点にも注目すべきである。「体内被曝」の代表的な放射性物質として、ヨウ素¹³¹ キセノン¹³³ クリプトン⁸⁵ セシウム¹³⁷ ストロンチウム⁹⁰があげられる。また、文部科学省の調査では、プルトニウムの飛散も確認されており、これにも注目すべきであろう。これらの発する放射線が、健康被害をもたらすのである。

「体内被曝」は、ホールボディカウンターによる外部からの計測とバイオアッセイ法による測定がある。ホールボディカウンターは、体内にとりこまれた放射性物質が発する放射線を外部から測定するものである。よって放射線が微弱であった場合は測定できない。一方バイオアッセイ法は、糞・尿を分析し、排出された放射性物質を分析することで「体内被曝」を証明する方法である。

しかし、いずれにしても測定するのみに、治療の効果があるわけではない。一度体内に取り込まれた放射性物質は新陳代謝などの作用により、排出されるのを待つしか手だてがない。ちなみに体外に排出されることによる半減期は、セシウム¹³⁷で110日といわれている。これは「生物学的半減期」であり、治療に

よるものではない。「外部被曝」には、洗浄という軽減方法があるが、「体内被曝」は、自然（肉体）にまかせるしか軽減方法はない。

ホコリをさけるためのマスクと食品の洗浄が、効果的な予防方法であろう。

おわりに

原爆にせよ原発にせよ、被曝に対する根本的な対処法はない。予防が唯一の対処方法である。放射性物質・放射線被害に、原爆と原発の違いはないのである。

被曝を防ぐには、地表の放射性物質を取り除くことが最も効果的といわれている。しかし、汚染された土の移動先は、現在もなお決定されていないのである。

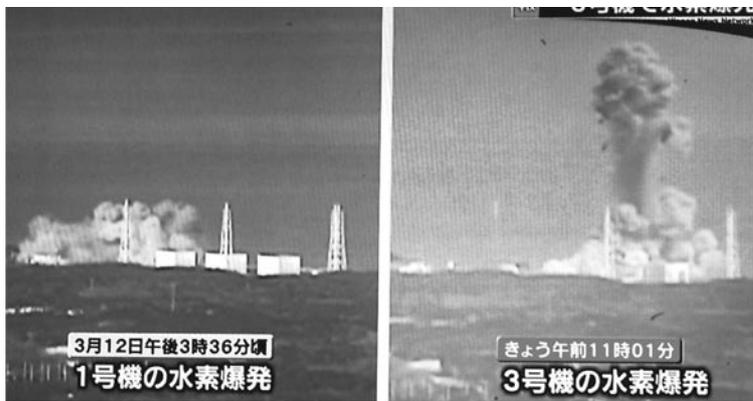
1986（昭和61）年4月26日、旧ソ連でチェルノブイリ原発事故がおこった。その後、世界中に反原発運動が起り、当然日本でも盛り上がった。その頃FM東京では、タイムマーズ（忌野清志郎）とブルーハーツというロックバンドの曲が放送禁止となった。いずれも反原発を歌ったためである。FM東京の大株主は、東京電力であった。

同じ頃名古屋の放送局では、原発事故の報道を危惧する職員がいたという。これは中部電力が大株主であることへの配慮であろう。

このふたつのエピソードから、現在の

原発事故報道について色々な想像をしてしまう。現在の原発事故報道の客観性はどのような評価できるのだろうか。先のエピソードのような、株主からの圧力や自主規制が存在するのであるか。とすれば、必要な情報が届いているとは言いがたくなるのである。

また逆から想像すれば、圧力をかけた自主規制が出来ないほどの事実が存在してしまっている、だから報道が許されている。とも考えるのである。つまり、圧力や自主規制が出来ないほどの事実だけでなく、報道の大部分を占めているのが



「3月12日に爆発した福島第一原発1号機（写真左）と14日に爆発した同原発3号機」（福島民報3月15日付紙面／福島中央テレビを撮影したもの）

現実である、といえるのである。かつての「大本営発表」。政府・軍部による情報統制であった。今回は、政府・財界そしてマスコミの情報統制を疑ってしまう。

平和展では、拙いなりに情報（史料）収集と情報分析（史料批判）を必須としてきた。今回の原発事故については、ひとりひとりがこの方法により事実を理解されることを強く望むものである。

そして「対症療法」だけでなく、「被曝」を完全に無くすための方策を考えていく必要が求められている。次回平和展まで、状況の変化を見つめながら、更なる学びを深めていきたい。

（平和展スタッフ 大東仁）

参考

- ・ 広島市・長崎市 原爆災害誌編集委員会編 『原爆災害 ヒロシマ・ナガサキ』 岩波書店 2005（平成17）年7月15日
- ・ 沢田昭二ほか 『共同研究 広島・長崎 原爆被害の実相』 新日本出版社 1999（平成21）年7月30日
- ・ 安斉育郎 『これでわかる からだのなかの放射能』 合同出版 2011年7月15日
- ・ 「特報」『中日新聞』 2011（平成23）年7月29日
- ・ 文部科学省ホームページ

INFORMATION

彰元さんのつどい

2011年10月21日 大垣教区主催

大垣教区では2000(平成12)年より毎年、非戦・平和を願った竹中彰元師を敬う会を開催している。

今回は大谷派の近・現代史を学ぶ一環として、戦争に反対したことによって大谷派から僧侶の位を3年間最下位に落とす「軽停班3年」や布教使の免許を取り上げる「免布教使」という処分を受けながらも非戦・平和を訴えた竹中師の声に耳を傾け、自分自身がどこに向かって生きるべきなのか、また教団がどこに向かっていくべきなのかを考える。

木々が日増しに色づいていく中、10月21日(竹中彰元師の御命日)に明泉寺で「彰元さんのつどい(大垣教区主催)」が行われた。非戦・平和を願った彰元師の声に耳を傾けることを趣旨とするこの集いに、お堂から溢れんばかりの老若男女が参加した。勤行に続き、「大逆事件～彰元 一国家・世間を超える～」と題し講演した田中伸尚氏(ノンフィクションライター)は「親鸞聖人は『非僧非俗』の立場に立った。国家につながる、国家の任命した『僧』ではなく、またそういう国家・僧を支持してきた世間・『俗』を超えて生きた聖人。大逆事件によって投獄された高木顕明師や反戦発言で有罪となった竹中彰元師が信仰をもって国家と闘った姿勢は聖人の姿勢と同様のものではないか」と語られた。

自らが身を置く国家・世間に迎合していく私に、人生における課題を持つこと、そしてそれを根拠として批判していくことの大切さを教えてくれている。原子力発電もTPPも財界や他国の意向に沿う形で進んでいく。だが、根底には国家・財界らの戦略があり、その実現のためには国家や財界が事実を事実として、また隠すことなく私たちに伝えてくれることはない。私たちは容易に定められた方向へと進まされるし、また自ら進んでいってしまう。だからこそ課題を持ち国家や財界、世間、教団そして自分への批判的な眼が必要になってくる。

国家・世間・教団がこぞって戦争協力へと進んで行った時、平和・非戦を主張した竹中師と高木師。「自らの課題を根拠とし、一人でも行動していく「単独者」であれ」という田中氏の言葉に両師の願いをうかがうことができる。

自分が何を課題にし、どう動くのか。両師の願いに耳を傾けていかなければならない。

(教化センター職員 小笠原 智秀)

教化センター日報
■2011年9月～11月

9月2日 研究生・聖教研修(荒山淳センター主幹)
6日 研究業務・「平和展」学習会
9日 研究生・実習「真宗門徒講座」
14日 HP「お東ネット」会議
16日 研究生・教化研修(竹橋太氏)
30日 研究業務・「平和展」学習会
研究生・学習会

10月5日 研究業務・「お講」調査
7日 研究生・実習「真宗門徒講座」
11日 HP「お東ネット」会議
14日 研究業務・「平和展」学習会
研究生・学習会
21日 研究生・聖教研修(荒山淳センター主幹)
「彰元さんのつどい」(大垣教区主催)参加
24日 研究業務・「平和展」学習会

27日 研究業務・「お講」調査
28日 研究生・学習会
11月4日 研究生・学習会
14日 研究生・実習「真宗門徒講座」
15日 HP「お東ネット」会議
16日 研究業務・「お講」調査
18日 研究業務・「平和展」学習会
研究生・学習会
研究業務・「法然と親鸞-ゆかりの名宝」展調査

公開講座にご参加ください (*両講座とも聴講無料)

◆聖教研修「『正信念佛偈』に学ぶ」※どなたでもどうぞ

講師 荒山 淳 (教化センター主幹) 会場 名古屋教務所1階 議事堂
期 日 2012年2月17日(金) テキスト 『正信偈』(東本願寺出版部刊)
時 間 午後4時30分～6時

◆教化研修「真宗儀式の教相」※僧籍者対象

講師 竹橋 太氏 (本願部出仕) 期 日 2012年4月6日(金)
時 間 午後4時30分～6時 会 場 名古屋教務所1階 議事堂

■教化センター

〈開 館〉

月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

お知らせ

◎2011年12月29日(木)～2012年1月7日(土)の期間、教化センターを閉館とさせていただきます。

◎2012年2月1日(水)～17日(金)の期間、教化センター所蔵図書、資料の整理を行います。この期間、図書、視聴覚資料などの貸し出しを停止させていただきます。借受中の方は1月31日(火)までにご返却ください。

ご迷惑をおかけしますが、ご了承の程、お願い申し上げます。

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

